

環境学習都市宣言

宣言文

いま、地球は危機に瀕しています。これまでの社会経済活動や私たち人間のくらしが、地球温暖化や砂漠化などの問題を引き起こし、自らの生存基盤でもある環境を脅かしています。

西宮市では、市民が主体となって、六甲山系の緑の山並み、武庫川・夙川などの美しい河川、大阪湾に残された貴重な甲子園浜・香櫨園浜をはじめとした豊かな自然を守るとともに、公害問題にも取り組むなど、良好な環境をもつ都市を目指してきました。また、阪神・淡路大震災の体験を通じて、自然の力の大きさとその中で生かされている私たちの存在を改めて学びました。

西宮の環境を、そして地球の未来を次世代に持続可能な状態で引き継いでいくためには、私たち一人ひとりが社会のありかたやくらしを見直さなければなりません。

環境学習とは、私たちのくらしが自然にどう支えられ、自然をどう利用してきたかを考え、環境に対する理解を深め、自然・歴史や文化・産業・伝統といった地域資源を活用しながら、地域や地球環境との望ましい関係を築いていくために学びあうことです。

私たちは、世代を超えて、家庭・地域・学校・職場などの様々な場所で、市民・事業者・行政の協働によって、人と人との新しい交流を生み出し、環境学習活動を支えるしくみをつくっていきます。

西宮に住み、学び、働くすべての人々が、文教住宅都市宣言（1963年）、平和非核都市宣言（1983年）の精神とあゆみを再認識し、環境学習を軸とした21世紀の持続可能なまちづくりを進めることをここに宣言します。

行動憲章

私たち西宮市民は、参画と協働の環境学習を通じて、21世紀の世界に誇ることのできる持続可能な都市を実現します。

1. 私たちは、自然のすばらしさを体験し、歴史、文化や産業と環境との関わりを学びあい、環境に配慮した行動を実践できる市民として育ちます。
2. 私たちは、市民・事業者・行政・各種団体・NPOなどとのパートナーシップの精神に基づいて、地域社会に根づいた環境活動を進めます。
3. 私たちは、くらしと社会を見直し、資源やエネルギーを大切にした循環型都市を築きます。
4. 私たちは、健康で文化的なくらしの中で、人と自然、人と人々が共生する、公正で平和な社会を実現します。
5. 私たちは、すべての生物が共存できる豊かな地球環境を次世代に引き継ぐため、環境学習を通じ、世界の様々な地域の人々とのネットワークづくりを行います。

平成15年12月14日
(2003年)

兵庫県西宮市

発行：西宮市環境学習都市推進課

兵庫県西宮市六湛寺町10番3号 TEL:0798-35-3821

企画・編集協力：NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）

協力：西宮市教育委員会

乳幼児期の保育・教育に携わる方々へ



持続可能な開発のための教育

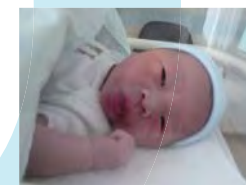
乳幼児期に

education for

育みたいこと

Sustainable

Development



環境学習都市宣言

西宮市は平成15年（2003年）に全国初となる「環境学習都市宣言」を行いました。そして、平成25年（2013年）に10周年を迎えます。同宣言の本文は、「…西宮に住み、学び、働くすべての人々が、文教住宅都市宣言（1963年）、平和非核都市宣言（1983年）の精神とあゆみを再認識し、環境学習を軸とした21世紀の持続可能なまちづくりを進めることをここに宣言します。」という言葉で結ばれています。

また、行動憲章-4では、「私たちは、健康で文化的な暮らしの中で、人と自然、人と人とが共生する、公正で平和な社会を実現します。」と謳われています。

持続可能な社会を目指していくためには、環境のみならず社会や経済などの様々な課題を総合的に捉え、包括的な視点に立って具体的な活動を進めて行く必要があります。

Education for Sustainable Development

平成17年（2005年）に国連で提唱された「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）（以下、「ESD」と略す）」は、こうした今日的な課題の解決に向け、自ら考え、積極的に社会に参画し行動できる人材の育成を目的としたものです。

我が国の教育現場では、平成21年度（2009年度）実施となった幼稚園教育要領・保育所保育指針及び小・中学校学習指導要領（平成20年3月）、高等学校学習指導要領（平成21年3月）において、持続可能な社会の構築の観点が入り込まれ、こうした考え方を基本とした教育が現場に求められています。これまでの「ESD」に関する多くの事例は小学生以上を対象としており、就学前の0歳から5歳までの子どもたちへの保育や教育とのつながりについてはほとんど取り込まれていません。

生涯にわたる生きる力の基礎が培われる乳幼児期

人の成長過程における乳幼児期の発達がいかに重要であるかは、古くから言い伝えられています。とりわけ乳幼児における大人との「基本的信頼感の形成」は人間の自己形成の基本となり、ESDで示されている「育みたい力」の根底をなすものだと考えています。

本サポートガイドは、平成23年（2011年）、平成24年（2012年）に西宮市立子育て総合センターの研究グループ「幼児教育」（公立の幼稚園・保育所各4名で構成）で行った2年間の共同研究において取りまとめられた内容を参考に整理したものです。

保護者、保育士、教員など乳幼児に関わる方々（以下、総称として「保育者」と略す）の日常実践を「ESD」の視点から振り返り、乳幼児期の保育・教育の重要性、社会的意義を再確認していただく上で、本サポートガイドをご活用いただければ幸いです。

●「持続可能な開発のための教育」を「ESD」と表記します。

ESD

■ 乳幼児期の保育・教育における「持続可能な開発のための教育」

乳幼児期の保育・教育の分野において、ESDの考え方はまだまだ浸透しているとは言えない状況です。乳幼児期の子どもたちに対するESDの考え方の一例を紹介します。

- 「ESD」で育みたい力 …… 3
- 乳幼児期における育みたい力を考える 活動事例紹介 …… 5

■ コミュニケーション力を育むことに関する例示

一人の人間として誕生した瞬間からコミュニケーションは始まります。「泣く」ことによって存在を訴え、生理的欲求を満ちし、微笑みや動作、言葉によって自らの意思を伝えるすべを年齢とともに広げ、人と人との関係を構築することにつながります。特に、新生児期における「生命の保持」や「情緒の安定」を保育者が責任をもって保証することは、大人との基本的信頼感を形成する上で最も重要なこととなります。

- 人間関係の基礎が形成される乳幼児期 基本的信頼感 …… 7
- 言葉（聞く・理解する・話す）を通じて …… 9

■ 主体的に生きる力を育むことに関する例示

乳幼児期において、「食べる」「排泄する」「寝る」「不快」といった生理的欲求を泣いたり、ぐずるなどして訴える子どもからのコミュニケーションは、生きる力の源とも言えるものです。

これらの行為が遊びや生活と相まって、一連の生活リズムとして習慣化するためには、保育者の援助が必要です。こうした生活リズムが整うことにより、何事に対しても「自分ですること」を求める意欲が高まります。

- 生理的欲求（食事・睡眠）が満たされることを通じて …… 11
- 基本的生活習慣（排泄・着脱・清潔）を通じて …… 13

■ 他者と関わる力を育むことに関する例示

乳児後期の「自分というものへの芽生え」や人見知りが生じるなど他者を認識するプロセスを経て、心身が急速に発育することにより、遊びも「一人遊び」から「平行遊び」「集団遊び」へと発展していきます。幼児期における「集団遊び」は、遊びを通じて他者との関わり方や集団の中のルールを学び、社会性を身につけていきます。

- 遊びを通じて …… 15
 - 自然とのふれ合いを通じて …… 17
- *本項における「他者」には、人以外の生きものも含まれています。

■ 乳幼児期の保育・教育から小学校に子どもたちの育ちをつなぐ …… 19

■ 日常生活の中で子どもたちの意識・活動をつなぐ …… 20

ちきゅうとなかよしカード、EWCエコカード

■ 西宮市立の保育所、幼稚園の共同研究メンバーからのコメント …… 21

環境学習都市宣言 子ども版「行動憲章」～今日から始めること～

私たちは、環境学習にすすんで参加し、さまざまな人たちと力をあわせ、環境を大切にす西宮市を100年後も世界中の人に誇れるまちにします。そのために、次のことから始めます。

- 1 私たちは、自然のすばらしさを体験し、歴史・文化・産業や暮らしと環境との関わりについて学びます。



- 2 私たちは、自分ができることから行動し、身近な人たちと協力しています。
- 3 私たちは、「もの」をくり返し使い、限りある「エネルギー」を大切にすまちづくりに参加します。
- 4 私たちは、人と人、人と自然が共に生き、公正で平和な社会をめざします。
- 5 私たちは、世界中の人と手をとりあって、かけがえのない地球を未来に引き継いでいきます。

0歳からの「ESD」の推進に向けて

今後、日本社会は人類がこれまで経験したことのない急激な人口減少を迎え、今、生まれた子どもたちが80歳を迎える時には、4000万人台になると予測されています。一方、世界の人口は100億人を超えるとも言われています。地球温暖化などの環境問題から食料問題、政治経済面での国際摩擦など様々な社会課題が噴出して来る激動の時代に

突入していくと思われまふ。しかし、これらの状況を前向きに捉え、公正で平和な持続可能な社会を目指していくことは時代のニーズでもあり、これらを実現していく人材の育成を行うことが「ESD」に求められていることです。

乳幼児期は、生きることのすべての基礎や土台となる「力」を育む大切な時期であり、その上に人間関係、環境、

地域や社会、世界へとつながりを広げ、関わりを深めながら次代を担う大人として成長していきます。

「ESD」の重要性を乳幼児期における子育てに関わり、支援する全ての大人が認識し、具体的な実践へと結びつけていく必要があります。

0歳児からの「ESD」で育みたい力

2年間の共同研究を経て、「ESD」という言葉から受ける印象と日常の保育実践で大切にしている子どもへの思いや眼差し、援助との関係が明確になってきました。乳幼児期における子どもの発達の特徴を踏まえ、保育者はどのような視点で子どもたちの自発的な成長の節目を見極め、どのような援助を行うことが重要なのかといったことを整理し、育みたい力の例示として右の3つの観点を取り上げました。

この3つの観点はそれぞれが相互につながり合っており、一体として考えることが大切です。



ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）

- 1. 批判的に考える力**
合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力
- 2. 未来像を予測して計画を立てる力**
過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力
- 3. 多面的、総合的に考える力**
人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的・総合的に考える力
- 4. コミュニケーションを行う力**
自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力
- 5. 他者と協力する態度**
他社の立場に立ち、他社の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度
- 6. つながりを尊重する態度**
人・もの・こと・社会・自然などの自分のつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度
- 7. 進んで参加する態度**
集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度

（国立教育政策研究所 教育課程研究センター作成資料より抜粋）

乳幼児の保育・教育と「ESD」

乳幼児を対象とした保育・教育では、これまでも「心情」「意欲」「態度」を育てることが人間形成の基礎を作っていくことになると考え、保育所保育指針や幼稚園教育要領に基づき各種実践を行ってきています。このことを踏まえ、「ESD」で重視されている能力や態度とのつながりを見据え、乳幼児期の発達の節目に応じた子どもへの援助や環境（「人」「自然」「物事」「出来事」など）の構成を考えていく必要があります。

本サポートガイドは、全ての環境要素を取り上げることは出来ていませんが、「人」や「自然」に関する一例をP.9から掲載しています。

保育者にとっての「ESD」

文部科学省国立教育政策研究所では、「ESD」で育みたいとする能力や態度の例示として、「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多角的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」を挙げています。（P.3下段参照）

これらは、これまでに保育所や幼稚園において大切にしてきた考え方の延長にあるものであり、人間としての成長や社会のあり方、関わり方へとつなげて考えるための方向性を示すものです。

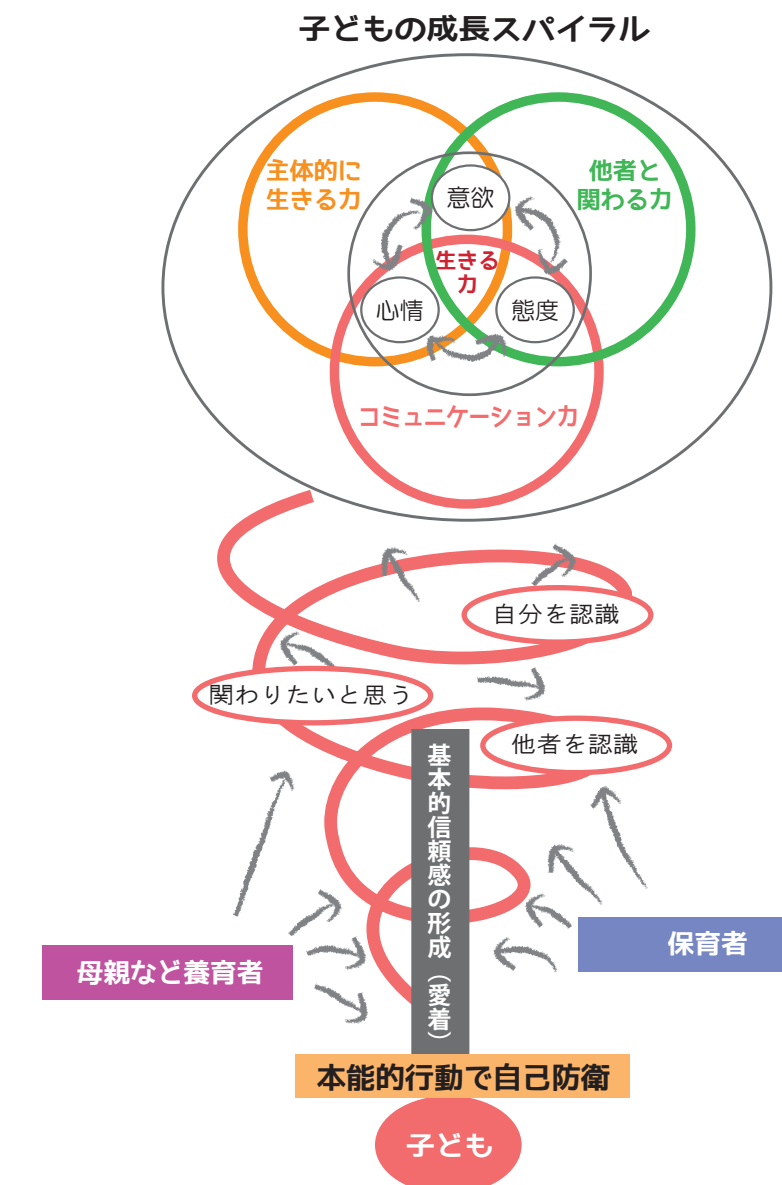
このことは、保育者にとっても自ら考えておかなければならない問題であり、保育者自身の人生において持続可能性や社会との関わり、自然との関わり、人との関わりといったことについてどのように考え、行動してきたかを自覚することも求められます。



大人が「ESD」の共通認識を持つことが重要

保育所・幼稚園での保育・教育の理念や「ESD」の実践を通じて、子ども一人一人が就学時を経て将来的にどういった大人へと成長し、社会に参画していくのかという未来を見据えたねらいについて、全ての保育者が共通認識を持っておくことが重要です。

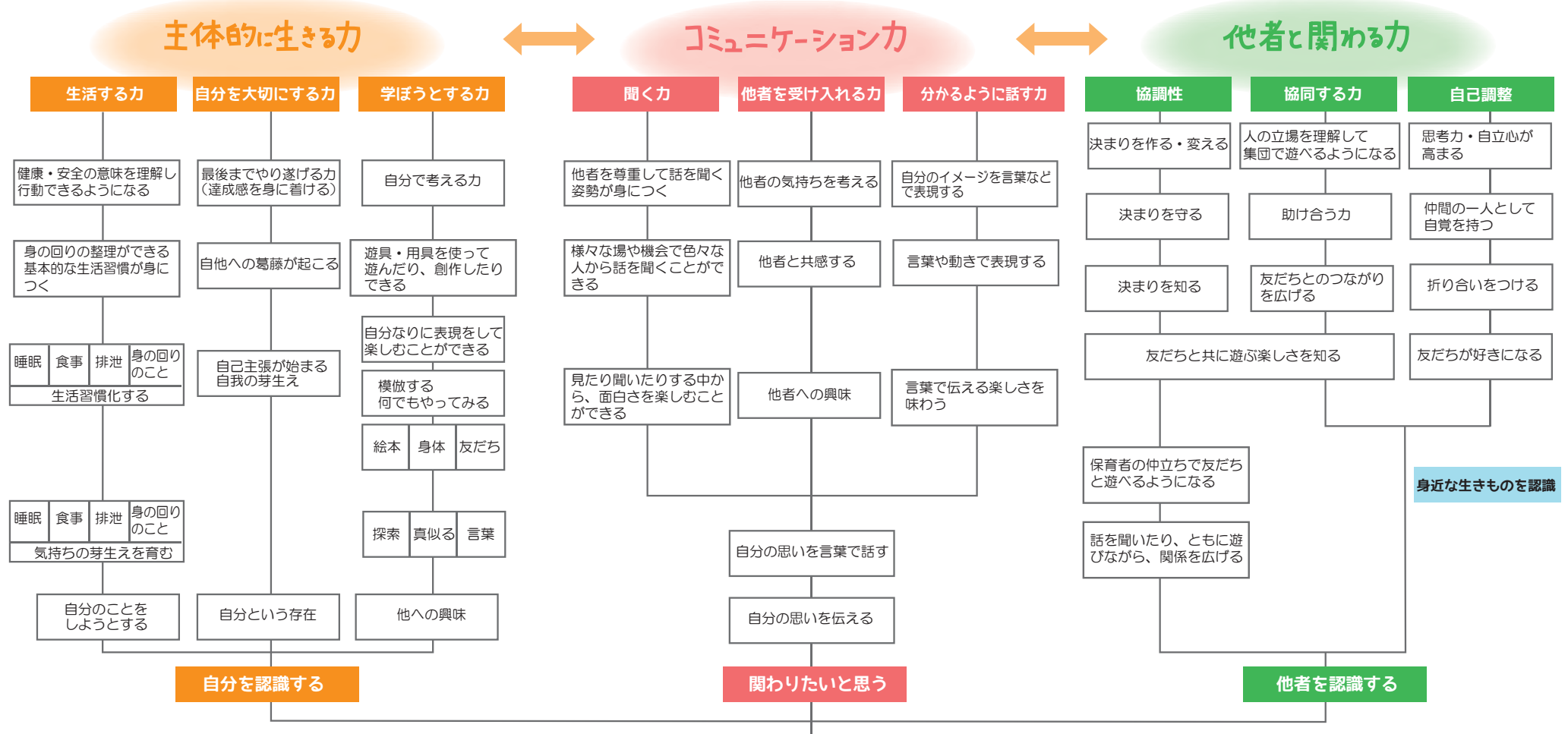
下図は乳幼児期における育みたい力を3つの観点から例示的に整理したもので、本サポートガイドを活用していただく際、ご参照ください。



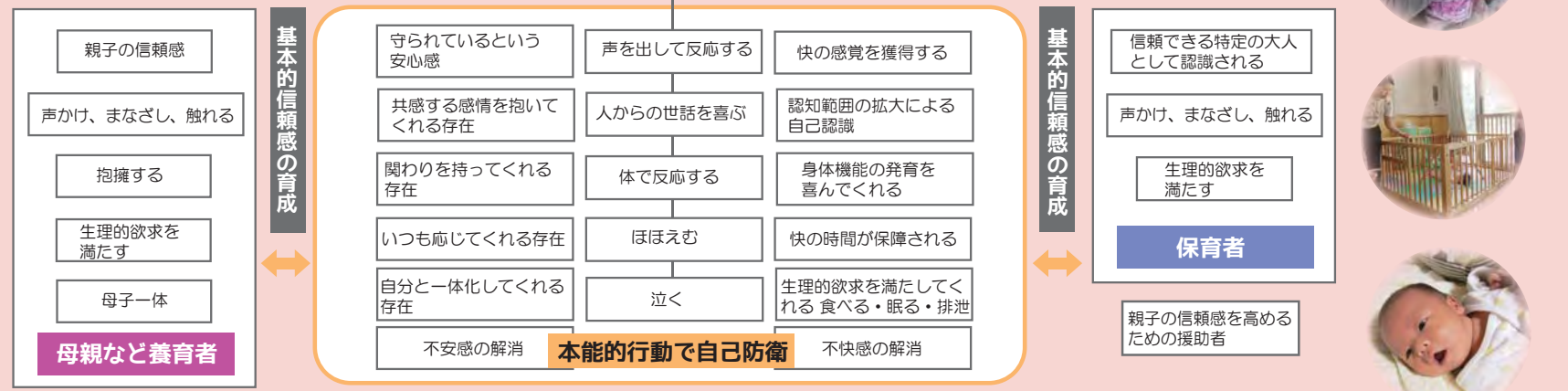
年齢	言葉	相互作用	動作
6歳頃	相手の気持ちになって行動できる		ブランコを立ってこく
	考えたことを話す 経験したことを話す		スキップをする
	日常のあいさつ (おはよう ありがとう)		片足ケンケンをする
	質問が多くなる 同年齢で会話する		つかまらないで階段を一人で上がる
	自分でやろうとする 語彙の急激な増加		両足をそろえてとぶ
	2語文を言う		ボールを投げる
	言語が増えてくる		
	名前を呼ぶと見る		一人で歩く
	意味のある単語（1語文）を言う		一人で立つ
	音をまねて言う		伝い歩き
	簡単な言葉が分かる		小さい物をつまむ
	人見知り		つかまり立ちはいはい
	喃語が増加		おすわりができる
	あやすと喜ぶ		寝返り
	あやすと声を出す		手から手へ持ち替えることができる
	初期喃語		物に手を伸ばす
	あやすと笑う		うつぶせで頭を上げる
			首が据わる
			目で動く物を追う
			手に触った物をつかむ
誕生			あおむいたまま手足を動かす

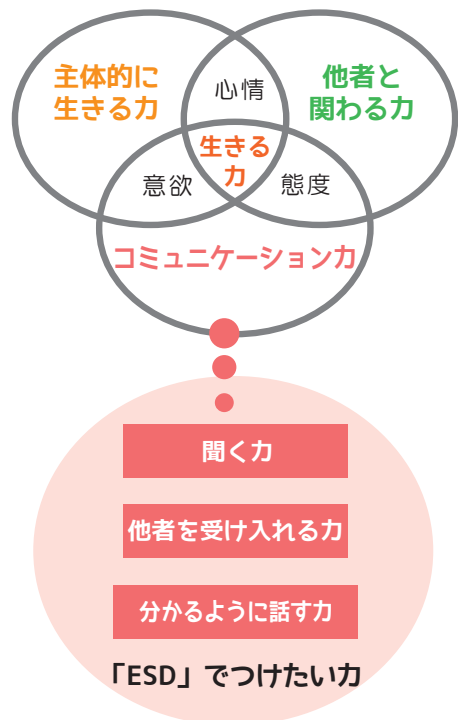
●保育士・幼稚園教員によるワークショップから

平成 23 年度に実施された保育士、幼稚園教員による共同研究において、乳幼児期における保育・教育への「ESD」の導入に向けたワークショップを行いました。
「ESD」で例示されている育みたい能力や態度を乳幼児期の発達段階において、どのように位置付け、体系的に整理すればよいかを考えるためフリーディスカッションを行い、各自がキーワードを書き出し、共通するものをグルーピングした上で、概ねの年齢ごとに整理したものが下図です。共同研究に参加したメンバーで意見集約したものであり、普遍的な整理にはなっていませんが、参加者自身の考え方を整理する機会にもなりました。一つの参考例としてご覧ください。



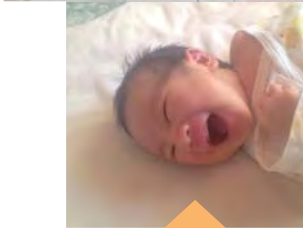
●乳児期は子どもの基本的信頼感を形成する上で保育者など、大人の関わりが極めて重要と考えられます。





発達の特徴

泣いたり、ほほ笑む



欲求内容を見つけ、満たすよう対応する

あやすと声を出す



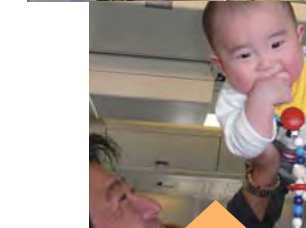
積極的に声かけやスキンシップなどの働きかけを行う

周りを探索し始める



安心感を与えるよう、スキンシップやまなざしを投げかける

簡単な単語を理解し、指さしなどをする



子どもからの働きかけに応答する関わりを行う

自我が形成しはじめる



自我の高まりと不安の間で葛藤していることを理解する

大切にしたいこと

ヒトは他の動物に比べ、お母さんの胎内から出て立ち立つまでに長い期間が必要です。特に、新生児期では、生きていくために必要なこと全てをお母さんや周りの大人に委ねており、泣くことを通じて訴えかけます。

生理的欲求を満たし、生命を守ってくれる大人は何よりも大切な存在であり、子どもはありのままの自分を受け入れてもらえることの心地よさを味わい、情緒の安定や大人への信頼感を形成するようになります。

お母さんは赤ちゃんを守り育てたいと思ひ、赤ちゃんはお母さんを特別な存在として意思表示を行うようになります。この関係は、お父さんなどの家族や保育士などにも広がっていきます。こういった特定の大人との情緒的なきずなが信頼感を培い、人間形成の基盤となります。

母子一体のつながりが情緒を形成し、安定する

新生児期は、親などの大人への全面的な依存状態にあり、絶対的に安心できる大人との一対一の関係がとても重要になります。

赤ちゃんからの働きかけに保育者が対応する

「赤ちゃんは泣くことが仕事」と言われるように、誕生間もない頃はコミュニケーションの手段は「泣く」ことを通じて行います。そして、反射的にほほえんだり、体での反応をするようになります。

赤ちゃんが安心感を抱くことで信頼関係が生まれる

子どもの生活リズムに合わせて心地よく過ごせるように声やしぐさ、動きなどを見て欲求を察知し、これに応じて信頼関係を築いていくことが大切です。

抱っこして、目を見て、声かけて

授乳中やあやしているとき、子どもと保育者は互いの目を見ています。保育者に抱かれて、声かけをされながら欲求を満たしてもらうことで意思疎通を図り互いの信頼感を高めていきます。



保育者からの働きかけに赤ちゃんが対応する

赤ちゃんからの欲求に保育者が対応していた時期から首が座る頃になると、保育者からの働きかけに赤ちゃんが反応するようになります。

身体機能の発育を喜び合い、心の育ちにつなげる

手でものを掴んだり、寝返り、お座りをするなど身体機能が発達することで、心の育ちにもつながり、喃語も増加し、大人との応答的関わりを喜びます。コミュニケーション力が高まり、特定の大人との間に情緒的な絆が形成されていきます。

不安な気持ちや甘えたい気持ちに伝える

一人遊びをしていても保育者が離れると急に泣き始めることもあります。不安な気持ちや甘えたい気持ちの表れです。抱っこをするなど十分にスキンシップを図り、保育者が常にまなざしを向け子どもに安心感を与えるようにします。

「人見知り」はマイナスではない

特定の大人との基本的信頼感に基づき愛着関係が形成されてくると、その反面人見知りが始まります。「自分というものの芽生え」ができてきたことの証です。

子どもの自発的な声出しや動作を見守り、環境を整える

ハイハイやつかまり立ちができるようになると子どもの世界が一気に広がります。子どもの自発的な行動を保障できるように、室内環境の安全性をより一層確保することも必要です。

関わりたいと思う意識を育てていく

自他の認識や人の感情などについての感覚的な理解ができるようになり、特定の大人との簡単な単語を交えてのコミュニケーションがとれるようになり、ますます情緒的なきずなが深まっていきます。

愛されていると感じられるように接する

子ども自身が、「愛されている」「受け入れられている」と感じることで自分を大切にしようとする自尊感情が形成されます。

愛着関係を基本に自我が確立していく

身体的にも一人立ちができるようになる時期は、一人の人間として成長していくための基礎が整ってきたと言えます。一人で遊んでいても安心感を持って過ごせるように見守ったり、一緒に遊んで楽しさを共有したりすることが大切です。

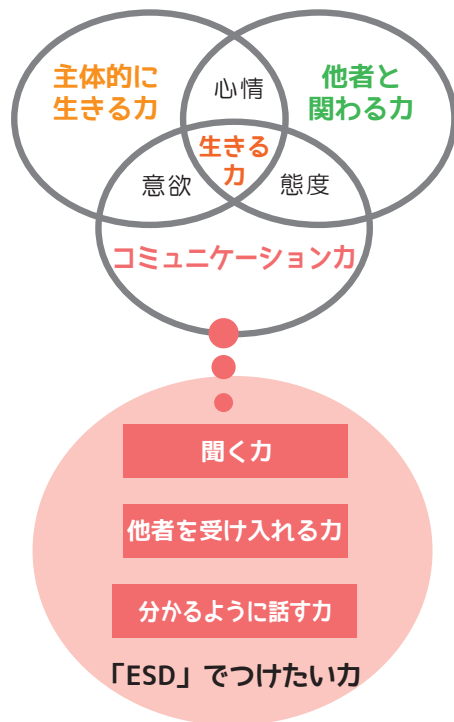
行動範囲の広がりや心の不安

遊んでいると思って側を離れるとその姿を見て泣いたり、後追いつたりということがあります。

心情・意欲・態度を育てる基礎が整う

情緒の安定や他者への信頼など基本的信頼関係が形成され、「自分というものの芽生え」が確立されます。周りの大人や友達などとの関わりの中で、子ども自身が一人の人間として生きていく上で必要な様々な力を身に付けていきます。

「泣く」「世話をする」「声かけをする」「心地よさを表す」などのコミュニケーションの積み重ねが心の土台となり、感情や言葉を育み、個性豊かな自我を形成することにつながっていきます。



発達の特徴

「アー」「ウー」などの声を出す
喃語（なんご）の始まり

簡単な言葉が分かるようになる

語彙（ごい）の急激な増加

「コレハ」「ドーシテ」の
質問が増える

自分の考えていることを
適切な言葉で伝えようとする



子どもの世界に入って関わる



共感し合う楽しさを伝える



聞く力が育つように
語りかけを行う



子どもの興味関心の広がり
に共感して関わる



子どもからの話しかけに、
向き合う

大切にしたいこと

基本的信頼感の中で、赤ちゃんは保育者の声かけを繰り返し耳にし、また口元を真似し、言葉と感情のつながりを読み取り、自分でも意思を表そうとするようになります。

最初は微笑みなど顔の表情で、また手足など全身を動かし、そして徐々に声を発するようになります。

自分の意思を言葉で表そうと喃語（なんご）を発し、大人からの声かけに反応して声を出し、しだいに単語の意味を理解していきます。

自分なりの言葉で気持ちを表現した時に相手にうなずいてもらったり、言葉で応答してもらったりすることで、もっと話そうという思いが育っていきます。

徐々に自分の感情や意思を表す言葉が増え、いろいろな人と活動する楽しさを味わえるようになる一方、幼児期になると自分の考えや思いを通そうとしつつも葛藤を感じながら、相手を理解しようとしていきます。その体験を重ねていくことで、相手の話を聞き共感や思いやりの心が育っていきます。

子どもへの日常的な声かけから

保育者からの声かけや語りかけを受けて、子どもから「アー」「ウー」などの声を出しはじめます。

喃語で子どもと会話する

保育者が赤ちゃんと同視線をあわせ、表情や口の動きがはっきりと分かるように抑揚をつけてゆっくりと語りかけることで、赤ちゃんも口を動かし初期喃語（なんご）を発するようになります。やさしい言葉で対話します。

喃語への対応が子どもの社会性を育む

言葉を通じたコミュニケーションを行うという社会性を培う基本となる時期です。ゆっくりと対話することが大切です。

日常的な「声かけ」「語りかけ」、友だち間の「語り合い」がコミュニケーション力である「聞く力」「理解する力」「表現する力」を育てていきます。

喃語の反復を通じて話すことへの興味が増える

喃語を反復したり、保育者との応答を繰り返すことにより、声を出して話そうとする意欲が高まってきます。共感し合うことの楽しさを伝えます。

名前を呼ぶことで見るようになる

繰り返し自分に向かって発せられる言葉（名前）に反応し、名前を呼ばれると相手を見るようになります。

簡単な言葉（1語文）が分かり、話すようになる

「パパ」「ママ」など大人が話す簡単な言葉を聞いて、音を真似て話すようになります。

意味のある言葉（有意語）を言える

「マンマ」など自分の興味があることを言語で表すようになります。保育者や周りのことを真似ることによって語彙数も増やしていきます。言葉での働きかけが重要になります。

したいこと、してほしいことを2語文・3語文で伝えようとする

2歳頃になると、自我が明確になることによって「マンマ、ホシイ」「コレ、ナアニ」などと自分の意思や興味を言葉で伝えるようになります。

また、「OOちゃん、コウエン、イク」などの3語文でのコミュニケーションも行ようになります。

聞く力を育てる

このように言葉が発達していくには、例えば、絵本の読み聞かせをじっと聞くなどの力が育っていることも大切な要素となります。

「ドーシテ」などの質問に応える

見たり聞いたりする中から様々な事柄に興味関心が広がり、面白さを楽しむようになります。また「コレハ」「ドーシテ」など頻繁に質問してくるようになります。子どもの気持ちに寄り添いながら、疑問や質問に答えたり、一緒に考えたりすることが必要です。

自他の関係を言葉でつなぐ見本を見せる

自分の名前を「OOちゃん」と呼ぶ段階から、ボク、ワタシなど代名詞が使えるようになり、おはよう、ありがとうなどのあいさつをするようになります。

言葉で伝える楽しさを味わうことができる

自分の思っていることが言葉で表現できるようになることから、友達同士の中で自己主張を行うなど日常的な会話を行うようになります。

経験したことを話そうとする

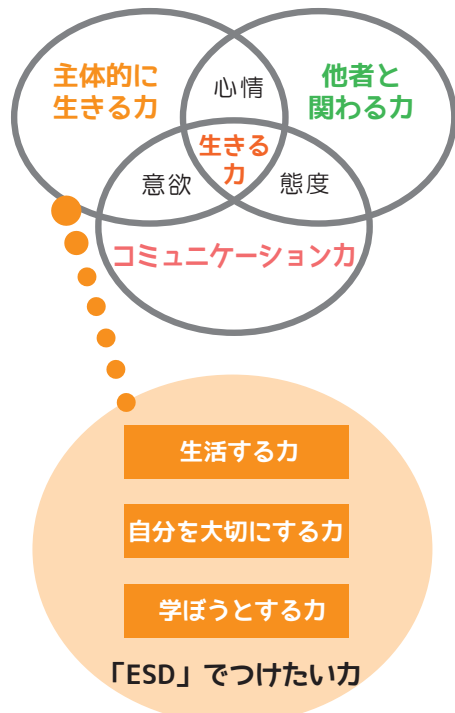
昨日に経験したことを思い出して話せるようになります。出来事を整理して記憶出来たという証しであり、自分と他者との言葉を通じたコミュニケーションに時間軸が加わってきます。

文字と言葉のつながりにも興味を持つようになる

文字にも興味を持ってくるようになり、ひらがなで書かれた自分の名前を読んだり、数字を読んだり直接的な会話によるコミュニケーションから文字を含めた言葉の使い方を学んでいきます。

他者の気持ちを考えて話すことの大切さを伝える

友達との遊びの中でルールを話し合ったり、協同でものを作ったりという行為の中で、自分の考えを言葉にして説明したり、友達の話を聞く姿勢が身につけていきます。感情表現をうまくできないと乱暴な言葉も出てきますが、保育者が適切な言葉を使ってコミュニケーションを図るように働きかけることで、社会性も育ってきます。



発達の特徴

空腹を泣いて知らせる



子どもの様子を見て何をしてほしいか気づく

お乳、ミルク以外に食べることが始まる



食べようとする意欲を大切にすること

手づかみやスプーンを使って自分から食べようとする



自分から進んで食べる意欲を大切にすること

こぼさないように一人で食べる



できたことを褒めて、自信が持てるようにすること

お箸を使って食事をする



子どもの達成感や自信など内面の育ちを大切にすること

大切にしたいこと

子どもの求めに応える

おなかがすいて泣いた時に授乳されることで、身体も心も満たされる経験をする必要があります。授乳する時には、赤ちゃんを抱き、しっかりと見つめて語りかけるなど、安心感も充足できるよう気をつけます。



リズムを把握する

お腹を満ち満足した後には、排泄し、その不快を解消することで心地よく睡眠につなげることができます。一連の生活のリズムを把握することが大切です。

信頼感を育てる

こうした生理的欲求に応え、不快を解消することの積み重ねは、子どもと保育者との信頼感を醸成することや、情緒の安定を図る上で、重要な要素となります。

生活のリズムをつくる

授乳に離乳食を加え、離乳期に移っていく時も、子どもの食べようとする意欲に注意しながら、生活のリズムをつくっていくことが大切です。

食べることへの興味や意欲が育つ

離乳食は味覚にも影響する重要なステップです。少しずつ、柔らかさや味、臭いなどの変化に慣れながら食べることへの意欲を培っていきます。子どもにとって楽しい時間になるように声かけや語りかけを行います。

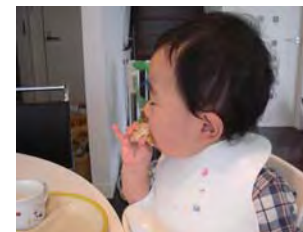
そしゃくして食べるということを感じる

だんだんと歯が生えてくる時期には、あごを動かす食べものも大切です。そしゃくの訓練になり、脳の発達にもつながります。



食べようとする子どもの意欲に応える

子どもが指差して食べものを知らせたり、指でつまんだり、お椀のお汁を飲んだり・・・と自ら進んで食べようとする意欲を示したときは、これに応じて援助します。



食べる楽しさを感じるようにする

興味をもった時に手づかみでも自分から食べようとする意欲を大切にします。失敗をしても、繰り返し行うことでできるようになるという思いを持たせることも重要です。食べることが楽しいと思えるようにします。



できたことを一緒に喜ぶ

お箸など道具を使って食事ができるようになることや保育者の援助が無くても一人で食べることができたことを褒めます。また、食べることができ食材が増えていくことに対しても共に喜ぶことが大切です。

生活のリズムを整える

早寝早起きや昼間に室外でしっかり遊ぶことにより、空腹になった時に食事がとれるといった食生活のリズムをつくることができます。食事の時間が家族や友だちとの楽しい時間になるようにし、生活リズムを整えることが大切です。

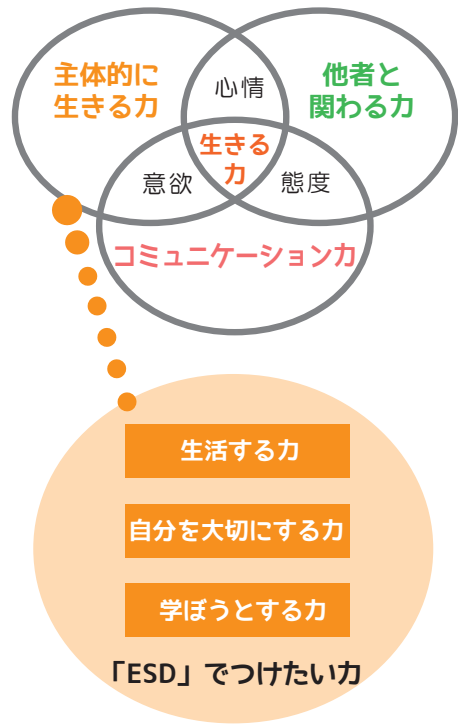
食事を作ってくれた人や命をいただくことに感謝する

食べることや食べ方についての習得だけではなく、食べることも考えることができるようになります。作ってくれた人への感謝や生きものの命をいただいているということについても理解できるようにするので、こうしたことへの大人からの声かけが必要になります。

食べることの意味・大切さを感じられる

様々な食品を食べることでたくさん遊べて、身体も元気になるということを理解し、自分の意思でこれを維持していくこと（生きていくこと）の大切さを伝えていきます。食べるという基本的な生活習慣（食を営む力）が身に付くよう援助します。

基本的な生活習慣（生活リズム）の確立は、子どもにとっての自信となり、自立して生きていく上での基礎となります。子どもの生活リズムを整えることは、保育者の大切な役割であり、責任と言えます。



発達の特徴

泣いたり、むずがったり、不快を知らせる



子どもの生活リズムに合わせて関わるポイントを把握する

心地よい感覚に対し手足を動かすなどして反応する



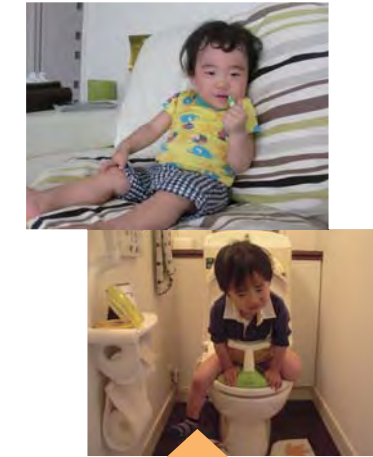
声掛けをして排泄したことを保育者も喜ぶ

便意を感じたり、おしっこをしたら知らせようになる



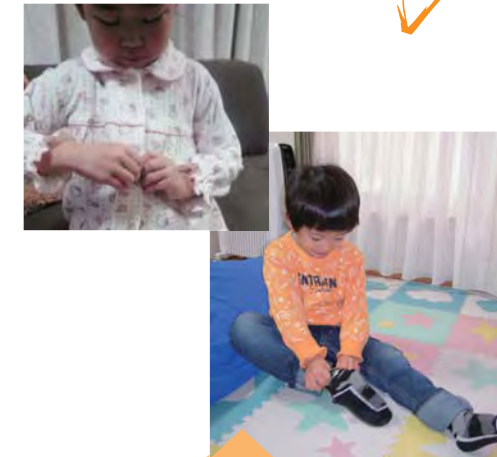
排泄を肯定的に受け入れられるよう声掛けを行う

排泄や衣服の着脱が一人でできるようになっていく



できたことを褒めて、自信が持てるようにする

排便や後始末、手洗いなどを一連の行為としてできるようになる



子どもの達成感や自信など内面の育ちを大切に

大切にしたいこと

排泄を自己コントロールできない

母乳やミルクを飲めば、腸の運動もつながり、前に飲んだものが排泄されていきます。新生時期の排泄は本人の意思に関わりなく行われるので、泣いたり、むずがったりした時に気をつけます。

子どもからのサインを見逃さない

排泄物は子どもの健康管理には欠かせない情報です。色や匂い、状態などから健康状態を見ます。特におしりや股間の肌のただれがないかも大切なサインです。

子どもに快の感覚と安心感を与える

食欲を満たすことと同様に、排泄した後処理をきれいにすることは、新生時期の子どもに「快」の感覚と安心感を与えます。



子どもにとって心地よい時間になるよう

「いっぱいだね」「きれいにしようね」などやさしく言葉をかけ、汚れを拭き取ります。離乳食が始まると、排泄物の状態や匂いなどを観察します。保育者からの働きかけで、排泄後の不快感を取り除くことによる心地よい「快」の体験が大切な感情を育てます。

子どもとのコミュニケーションを図る大切な時間

おむつ替えは保育者と子どもの一対一のコミュニケーションの絶好の時間であり、声かけやスキンシップをしっかりと取ることによって一層、関係性が深まります。



便意や排尿後の不快感を意識できるようになる

しっかりと食べることができるようになると排泄もそれに伴い変化してきます。便意や尿意を感じたり、おむつの中でおしっこをしてしまうと気持ち悪さを感じて知らせに来たり、自分のこととして自覚できるようになってきます。

気持ち良くなったことを共感する

排泄してしまったことに否定的に対応するのではなく、「しー出たね」「すっきりしたね」と子どもの気持ちに共感することで排泄することを肯定的に捉えられるように関わるのが大切です。

排泄や衣服の着脱に自ら関わろうとする

便器にすわって排泄するまねをしたり、パンツやズボンを自分で着脱したり、何事にも関わろうとする姿勢が現れてきます。



子どもからの訴えにタイミング良く応じる

「しーでた」「しーでる」と思いを伝えにきた時はやさしく受け止め、便器やおまるに座らせ、排尿後の始末を丁寧に、できたことを一緒に喜びます。

子どもが自発的に排泄しようとする環境を整える

排泄することを自分の意思で行えるようになり、おむつも外れると、自分でできるが増えてきます。排泄や排泄後の衣服の着脱を自分でしようとするのを保育者が丁寧にやさしく援助することが大切です。

排泄、衣服着脱、手洗いなど一連の流れを習慣づける

排泄、着脱など個々の行為を自分でできるようになってきたら、排泄、着脱、手洗いなどの行為を一連の流れとして理解できるよう、保育者が援助していくようにします。

「自分でしたい」「自分でできる」という気持ちを大切にしてい

自分でパンツやズボンをはこうとしている時は様子を見守りながら手を添えずボンの向きを知らせたり、足を入れる位置を知らせたりすることで「自分で」という気持ちが満たされるようにします。また子どもの「自分でした」という嬉しい気持ちに共感し、共に喜び、自信が持てるようにします。

排泄、衣服着脱、手洗いなど一連の流れが習慣となる

排泄、着脱、手洗い等の行為が一連の流れとして自立して行えるようになることは、身体能力の発達や自己（自意識）の確立、個々の行為の習熟などが総合的につながり合って習慣として身に付き、主体的に生きる意識を育てていきます。

基礎的生活習慣を身に付けることは自分を守ること

5歳児では、自分の身体の成長や健康に興味を持ち、基礎的生活習慣を身に付けることが「なぜ必要か」を感じて取り組めるよう、働きかけます。



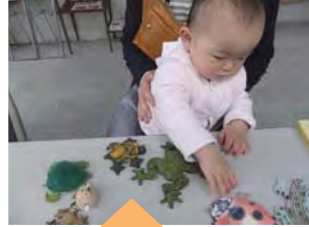
発達の特徴

音や動きに反応して、目や身体などを動かす



身体の発達に応じた声かけやスキンシップを心がける

座る、はう、立つ、つたい歩きと世界を広げる



好奇心に応え、「遊び」を広げるための安全な環境づくり

言葉や動作を真似て遊んだり、友だちと関わり合うことが始まる



一人遊びに寄り添うと共に友だちとの出会いをつくる

気の合う友だちとごっこ遊びや創造する遊びを始める



子ども同士の自我のぶつかり合いを認める

身体を使った集団遊びを工夫しながら楽しむようになる



一緒に活動する楽しさを味わえるようにする

大切にしたいこと

健康で情緒が安定していることから「遊び」が始まる

新生児は、「食べる・排泄する・寝る」の基本的欲求を泣いて知らせ、満たされると泣きやんだりコミュニケーションを取りながら、自分を守ってくれる大人との関係（情緒的な絆）を築いていきます。この安心感に支えられた安定した情緒が保たれることによって、「遊び」も現れてきます。

身の回りの音や動き、触れるものに反応した遊び

視野に入ったものを見つめたり、声や音に反応したり、指に触れたものを握ろうとするなど反射的な運動が起こり、感覚遊びが始まります。

大人からの声かけを喜ぶ

首が座ってくると、視野も変化し、五感（目・耳・口・鼻・皮膚）を十分に働かせ、周りの様子をうかがい、大人からの語りかけや遊んでもらうことを喜ぶようになります。

行動範囲の広がりから社会性を育む基礎となる

寝返りやお座りができ、はう、立つ、つたい歩きをするようになるなど急速に身体が発達することで好奇心も旺盛になり、自発的に行動し、どんどん世界を広げていきます。

一人遊びは集団遊びの基礎

ものを掴んだり、離したりなどの手足や指先の機能も発達し、思いを指差しや言葉で表そうとするなど自分の意思で体をコントロールできるようになってきます。つかんだものをなめたり、遊具で遊んだり、箱のティッシュを取り出すことなどに夢中になります。こうした「一人遊び」を満足いくまで繰り返し行うことで、自意識を芽生えさせていくことにもつながります。

「見守っているよ」の合図を送る

「一人遊び」に夢中になっていても、突然、不安になり保育者を探ることがあります。近くにいることや見守っていることを感じられるようにまなざしを向けたり、声かけをすることも必要です。

ものを使った遊びを行う

指先の機能発達や一人で歩くようになるなど、基礎的運動能力が身に付くことにより、ブロックや積み木を並べる、組み立てる、箱につめる、砂をすくう、乗り物に乗るなどの遊びをするようになります。

大人のすることを真似た遊びを行う

人形に興味を持ってミルクをあげる真似をする「ままごと」などの「ごっこ遊び」を保育者と一緒にするようになります。



自分で遊びながらも友だちの存在も意識し始める

自分のやりたいことを納得するまで行うことで充実感を味わい、友だちのことにも目を向けることができるようになります。まだいっしょに遊ぶことはできませんが、友だちの遊びをじっと眺めていたりします。

他の子どもといっしょに遊ぶことを楽しめる

役割を決めた「ごっこ遊び」や物を組み立てるなどの遊びを気の合った友だちと行うようになり、友だちといえることが楽しいと思えるようになります。

人や自然、物事など身近な環境に積極的に関わり、遊び方も学ぶ

言葉でイメージを共有したり、目的を持って行動し、創作的な活動ができるようになります。こうした仲間との関わりを通じて人の気持ちを理解し、折り合いを付けることができるようになるなど、社会性を身に付けていく上での重要なステップとなります。

ぶつかり合うことも社会性を育む上での重要な経験

一方、自我の発達から友だちと物の取り合いが起きたり、自己主張のぶつかり合いが起こったり、言葉でうまく説明できないことから自分自身との葛藤も生まれてきます。これらを通じて、人との関わり方の原点が身に付くことにつながります。

運動能力の発達に応じた屋外での遊びを重視する

走る、跳ぶ、登る、蹴る、投げるなどの運動能力をコントロールし、集団で楽しく遊ぶための工夫を行うことができるようになります。屋外での鬼ごっこや追いかけて、ボール遊びなどを通じて健康な身体作りにもつながります。

協調性や協同する力を育てる

子どもたちは、成長とともに、場に応じて自我を抑え、相手を尊重することができるようになり、友だち同士の遊びの中で役割や約束事を決めたりして遊びを楽しむようになります。時には、保育者の援助を必要とする場面も出てきますが、「集団遊び」は子どもたちが社会性を身に付けていく上で大切な機会となります。

創造する遊びを通じて新たな発見に出会う

「創造的な遊び」を行う中では、想像力を豊かにし、思考力の芽生えを養い、工夫する力を育てていくことができます。一人一人が自分の思ったことや感じたことを言葉や身体で表現する楽しさを味わえる場をつくることも大切です。



発達の特徴

生理的欲求を満たしてもらうことで生命力の基礎を作る



病原菌や外的環境から守るため清潔面などで注意を払う

太陽の日差しや風を心地よいと思えるようになる



体温調整能力などが十分に発達していないことに注意する

よちよち散歩など外での活動を好むようになる



「これ何かな」といった大人からの言葉かけで世界を広げる

不思議だね・きれいだね



見て、触れて、一緒に遊ぶ

捕まえない



いのちの大切さや自然との共生、人とのつながりを伝える

大切にしたいこと

胎内から体外へという生育環境の劇的転換を支える

自然界には様々な病原菌が存在しています。抵抗力の無い乳児期には、なるべく混雑した場所や気温変化の激しい場所に連れて行くことを控えたいものです。徐々に戸外に出て、温かい太陽の光、やさしい風など穏やかな自然と一緒に楽しみましょう。

生まれた直後の子どもにとって自然は危険なもの

産声をあげて自然界に出てきた子どもが初めて接するのは、母親のぬくもりと声です。母親など保育者の言葉かけは「守られている」という安心感を与えます。

抵抗力が着けば少しずつ外部環境に慣れさせる

順調に体重も増え、視聴覚の機能が整ってきたら、部屋から外の外気に触れていくことになります。子どもにとって気温や太陽光線、風などの自然環境が心地よいと思える条件を考えます。

子どもたちは自然の中で自由な発想のもと、延々と遊びを作っていきます。自然の中の不思議さや驚き、発見、親しみなどが感性を育み、創造性や柔軟で能動的な対応力を身に付けていきます。

少しずつ屋外に出る時間を長くし抵抗力をつける

太陽の日差しや風を肌で感じて心地よいと思えるだけでなく、まぶしかったり、寒かったり、暖かかったりという変化にもついていけるよう身体を慣れさせ、抵抗力をつけていくことが大切です。

鳥や動物の鳴き声、風の音などにも興味を持つよう言葉かけを

乳児期の子どもにとって自然とのコミュニケーションは、保育者を通して始まり、五感で触れ合います。保育者からの言葉かけによって、子どもたちの自然への感じ方、接し方も変わり、興味を広げることにつながります。



自然物との原体験を増やしていく

土、水、葉っぱ、虫、動物など色々な自然との触れ合いが始まります。大人の見守りの中、触れることができる世界が広がっていきます。子ども達にとって、この自然物と初めて触れる体験（原体験）が、より深い自然との関わりや感受性を育み、好奇心や探求心を芽生えさせます。



動くものに興味を持つだけでなく恐れることも感じる

少しずつ動くものに対しても興味を持つようになります。生きものとしての理解はないものの、恐る恐る触れてみようとするなどの直接体験を繰り返して行うことを通じて、生きものとの関わりが始まっていきます。

かわいい、きれいなどの感情の芽生え

自然界の生きもの、植物に手をのぼしたり、じっと見ていることがあります。言葉かけをして、子どもの気持ちをくみ取り、「かわいい」「きれい」といった言葉に表すと同時に一緒に感動をわかちあいます。



自然物を使ってごっこ遊び

葉っぱ、砂、泥、水などを使った「ごっこ遊び」が大好きです。時には、石をケーキの飾りのイチゴに見立てたり、土と水を混ぜてコーヒを作ったりしながらイメージを形にしていくことで創造力を伸ばします。



誕生や成長を喜ぶ、死を悲しむなどの感情が芽生え発達する

生きものの飼育や栽培などを通して、成長すること、生と死があることなど、命や生きることへの認識を持つことができます。



捕まえないという意欲（動物的本能）

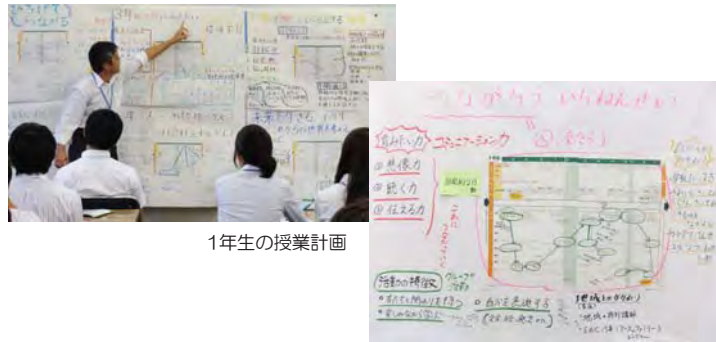
生きものを捕まえるには、集中力と運動能力が必要です。自分の身体をコントロールして、生きものを傷つけないようにアミを振る行動は、何度も失敗を繰り返しながら習得していきます。バッタやチョウ、トンボなどを捕まえることができた時の達成感や自信は自分自身への自信にもつながります。



小学校6年間で育みたい力

学年	育みたい力	学年テーマ
1	・創造力 ・聴く力 ・伝える力 ・コミュニケーション力	つながろう いちねんせい
2	・挑戦する力 ・協調性 ・自分の周りの人や生き物を大切に	自分も大切 みんなも大切
3	・思考力 ・判断力 ・表現力	自然とともに生きる
4	・表現力 ・認め合う力 ・社会性	のばせつる！ 育てへちま
5	・仲間とともに助け合う ・自主・自律 ・選択、収集能力	一人でも みんな でも できる
6	・発信力 ・行動力	共に生きる

平成23年度新任教員研修グループワークより



1年生の授業計画

小学校の各学年において、ESDをどのように進めていけばよいか、どのような「力」を育むのか、「育みたい力」を連続したものとして捉える事が求められます。

小学校における取り組みの最初は1年生から始まりませんが、1年生には保育所に通っていた子ども、幼稚園に通っていた子ども、家庭で育てられた子どもと異なった環境で育った子どもたちが一度に入ってくるようになります。

1年生の担任教員は、校区内の保育所や幼稚園ではどのような目標を設定して保育を行っているのか、家庭で育ててきた子どもたちは地域との関わりや友達との関係をどのように作ることができるのかといったことを把握することから始まります。現在、小学校や保育所、幼稚園間では相互の情報交換のための施設見学や実践交流が行われています。

また、新任教員を対象とした環境教育研修では、各学年のカリキュラム作成を考えるに当たり、学年間のつながりが重要であることを学び、「ちきゅうとなかよしカード」で培われてきた自然への興味、体験が1年生の学習につながるように授業計画が作られました。

小学校での「EWCエコカード」もこのような学びを支える連続性のあるツールとして使われていくことが望まれています。

実践例

春の幼稚園の花壇には、チューリップやパンジーの花が咲き、アリやダンゴムシ、ハチなどの虫が歩いていたりします。入園して間もない4歳児は、まだまだ自分のことで精一杯ですが、先生と一緒に遊んだり、自分のしたいことが見つかったり、顔見知りの友だちと遊んだりすることで気持ちが安定してくると、少しずつ自分の周りの様子が目に向くようになってきます。5歳児が花びらを使って色水遊びをしようと花壇の花びらを拾っているところや畑や花壇で虫探しをしているところに近寄っていき、興味や関心を示す子どもが出てきます。

5歳児がジャガイモ畑で友だちと虫網と飼育ケースをもって虫探しをしているところに一緒に混ぜてもらって、毎日虫探しをしていたA児。ある日、「 TENTUMUSHI見つけた！ ケースちょうだい」と大喜びで担任に見せにきました。飼育ケースにTENTUMUSHIを入れたら、さっそくTENTUMUSHIの様子を見ていたのですが、その様子にB児が気づきました。「（ケースの）壁昇ってる」「上まで行ったら飛ぶで！」「飛ぶ！飛ぶ！」「えっ？飛ぶの？」

A・B：「飛ぶで！」ところが・・・テン

遊びは学び 身近な自然体験から

TENTUMUSHIは飛ばず、飼育ケースの縁をぐるぐる歩いて回り始めたのです。

今までに自分が探して触れて見た、あるいはテレビやビデオ、図鑑で知っているTENTUMUSHIは上まで昇ると飛んだのかもしれませんが、自分たちの予想とは違うTENTUMUSHIの様子を見て、「よーいドン！してる」「かけっこしてる」としばらくTENTUMUSHIの動きを興味深く見ていました。その後、クラスでA児とB児が楽しかったことについて話を聞き、TENTUMUSHIの様子を全員で見ることになりました。

「先生、手の上（指）昇らせて」という声に、飛んでいってしまわないように保育室の窓を閉め、手の指を昇らせると・・・今度は指の先で止まりました。

「止まった！」「くっついてる！」「どうしたのかな？」「（みんながいて）びっくりしてるのかな？」「こんにちわ」「よろしくね」と子どもたちそれぞれの気持ちが聞かれました。

TENTUMUSHIはしばらく指の上でとまっていたのですが、窓のカーテンのところに飛んでいき止まりました。その後、「飛んだ！飛んだ！」と子どもたちは大喜びで、TENTUMUSHI

シになり飛んで遊びました。

生き物や自然現象は、時として自分の思い通りにならないことがあります。だからこそ、驚きや不思議さ、大きさや美しさ、畏敬の念を感じるのでしょう。この日の、子どもとTENTUMUSHIを通じたかわりからは、知識とは違う、生きた子どもの実感を感じ取ることができました。肌で、感覚として感じる生きた体験を大切にしたいと感じたひと時です。感じることを豊かにすることが、人（友だち）との気持ちの共感に繋がります。

その後、自分が作りたいTENTUMUSHIのペーパーサートを作り、友達とごっこ遊びをしたり、畑でTENTUMUSHIを探したり羽化を見たりするなど、遊びを通して自己を表現する力や人とかかわる力、知的好奇心や科学的な感性、思考力など多くの学びの芽につながることを再認識することができました。

このような子ども達の様子を保護者に知らせ、親子で自然の中で遊んだり、話題にしたりと、家庭との連携を図ることも重要だと感じています。

西宮市立今津幼稚園 加納 幸子

西宮独自の環境学習・ESDの活動のしくみ

西宮市では平成4年（1992年）から、子ども達が継続的に環境学習に取り組めるように「地球ウォッチングクラブ（EWC）」事業を始めました。この事業は、環境庁（当時）の全国事業「こどもエコクラブ」のモデルにもなりました。その後、平成10年（1998年）、現在のかたちである「EWCエコカードシステム」を市内の全小学生を対象に導入しました。

平成19年度（2007年度）から就学前の幼児を対象とした「ちきゅうとなかよしカード」を市内公立保育所で開始

し、平成22年度（2010年度）からは公立幼稚園でも実施されています。

保育所や幼稚園では、すでに様々な環境活動が行われています。自然体験や、生活習慣を育む活動など、そういった活動を「ちきゅうとなかよし、いきものとなかよし、ともだちとなかよし」をテーマにしたカードを使うことにより、子ども達が楽しみながら環境意識を継続的に高めていくことが目的です。

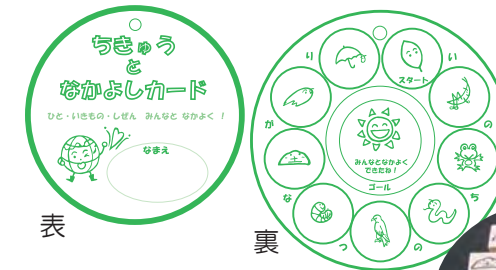
保育所・幼稚園内で行われていた「ちきゅうとなかよしカード」の取り組みは、小学校になれば「学校、地域、お

店」でエコスタンプを押印してもらえる「EWCエコカード」の取り組みに継続され、地域をフィールドとした、より広い世界での環境活動に発展していきます。

ESDにおける「育みたい力」は、家庭、保育所、幼稚園、小学校、中学校へと継続的・系統的に積み上げていくことが求められ、今後、保護者はもとより各保育・教育機関の関係者の共通認識を深めていく必要があります。

ちきゅうとなかよしカード

保育所、幼稚園児向けカード



「いのちのつながり」を意識付ける生態系の生きものを表したスタンプ

保育所、幼稚園の中で、環境に配慮した生活や自然に親しむ活動、人となかよくすること等を行った時に先生からスタンプを押してもらい、継続的な活動となるように工夫しています。

<活動例> (3, 4, 5歳児)

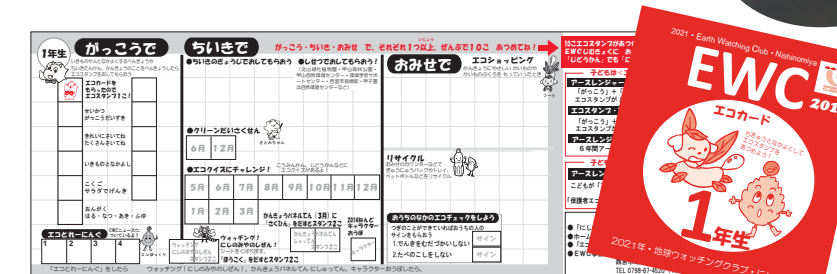
- (自然となかよし)
 - ・花の水やりをする
 - ・花や虫を大切に
 - ・野菜の栽培と収穫、食べる
 - ・給食、おやつを残さず食べる
 - ・散歩に行った時に、ごみを拾う
- (環境となかよし)
 - ・お部屋をキレイにする
 - ・水道の水をきちんと止める
 - ・使わない部屋の電気を消す
 - ・暖房がついている部屋の戸は閉める
 - ・トイレのスリッパをそろえる
 - ・おりがみなど紙を大切に使う
 - ・うさぎのエサやり、小屋をそうじする
- (人となかよし)
 - ・友だちと仲良く遊ぶ
 - ・お弁当をみんなで楽しく食べる

EWC エコカード



小学生向けカード

エコスタンプ



「ちきゅうとなかよしカード」で取り組む内容は、身の回りの環境について「気づき」を促すものですが、小学生では、「学校」「地域」「お店」と範囲を広げ、多くの人との関わりの中で自己評価していくものとなっています。

「EWCエコカード」は、市内小学生約29,000人に学校を通じて配布されています。子ども達が学校で環境について学んだり、お店で環境に優しい商品を買ったりすると、先生やお店の方からカードに「エコスタンプ」（市内約2000個）を押してもらえます。エコスタンプを10個集めると「アースレンジャー」に認定されます。

身近なところで自然や環境に関する活動ができること、また地域と子どもたちがつながるしくみとして活用されています。

平成24年度（2012年度）のアースレンジャー数は、市内小学生の約2割となっており、地域に定着した活動となっています。

保育所から

「子どもの最善の利益」を守るために

保育所に入所する子どもの育ちを支える保育所の役割は、「子どもの最善の利益」を考慮し、保育所そのものが「最もふさわしい生活の場」でなければならないということが保育所保育指針で明確に示されました。そして、保育所保育指針の第1章総則の保育の原理に「保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」とあり、持続発展教育（ESD）の「生きる力を育む」ということそのものであると思います。私達が日々行っている保育の質を高め、子ども一人一人の就学後、或いは子どもが大人になる未来を見据えてつなげられるような保育に努めることが、幼児期のESDをすすめる、私達大人がやらなければならないことと強く感じています。

そこで、この乳幼児期の子どもにどのような力をつけたいかと具体的に考えたとき、「人とかかわる力」「生活する力」「学びの芽」が大切ではないかと思えます。

■人とかかわる力

「人とかかわる力」とは人間関係の基礎をしっかりと育てることです。おおむね6ヵ月未満の子どもからおおむね6歳の子どもの生活している保育所では、十分に養護の行き届いた環境の下、特定の大人が親密なかかわりを繰り返し持つことで信頼関係を築いていきます。その大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともにまわりの人への信頼感が育ちます。そして、次第に自我が芽生え、また、大人との信頼関係を基にして友達への関心が高まり、一緒に遊ぶことを喜ぶようになります。成長するにつれ、友達との様々なかかわりの中でぶつかり合いなどの経験を通して友達への思いやりの気持ちを持ち始め、自分の意見も言うが友達の話も聞けるようになります。このように、一人一人の成長が集団の中で発揮出来、集団の中で生かされ、お互いの存在や良さを認め合えるような集団の育ちへつなげていくことが大切と考えています。

■生活する力

「生活する力」は子どもに基本的な生活習慣が身につくように育てることです。子どもは安心できる大人との関係の下、大人の養護的なかかわりやその姿を通して、見通しを持った生活の仕方や習慣・態度を徐々に体得していきます。大人は子どもの見本となるように常に自分自身や自分の保育を振り返り、省察することが求められます。



幼稚園、保育所の共同実践研究「ESD」グループ研究会（平成23-24年度実施）

■学びの芽

「学びの芽」とは保育所における教育的側面で、子どもが大人の援助により環境との相互作用を通して、生きる力の基礎となる心情、意欲、態度を身につけていくことです。「望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」ため、大人は子どもの将来を見据え、願いをこめて自らの経験を受け渡していく営みであるともいえます。この視点を持ちながら、大人が一方向的に働きかけるのではなく、子ども一人一人の存在を受け止め、その育ち行く姿を見守り、大人の温かな視線や子どもへの信頼が子どもの意欲や主体性を育てていくと考えています。

そして、保育は保護者と共に子どもを育てる営みであり、子どもの24時間の生活を視野に入れ、保護者の気持ちに寄り添いながら家庭との連携を密に行わなければなりません。保育所での保育がより積極的に乳幼児期の子どもの育ちを支え、保護者の養育力の向上につながるよう保育所の特性を生かした支援をすることの大切さを再確認しました。

西宮市立高須西保育所 大澤 雅代



保育所：ピオトープ池

幼稚園から

ESDマインドをもつ教師をめざして

ESDでは、「持続可能な社会の実現をめざす」ため、人育てをどのようにしていくことが必要なのかが大きな課題となっています。人間として基礎を培う乳幼児期をどのように育てていくことが望ましいのか。今日、生活(地域)が子どもを育てていくという認識が希薄になってきています。私たちはこの時代にふさわしい教育を考えていかなければなりません。

親としての心構えや姿勢をしっかりとってもらうことを指導することも必要ではありますが、赤ちゃんに触れる体験がないまま親になるケースが増加するなど、今日の家庭の育児事情やその背景を知ること重要です。幼稚園等の施設では、子ども達に多様な経験を積み重ねさせることが子どもの自主性を育て、豊かな人間関係を築くことなどにつながってくると考え、教育していければと考えています。

そこで幼稚園等の施設の子どもの実態や地域の実情を踏まえ、地域の環境を活かし、生きものや動植物などの自然環境の出会いを大切に、新しい発見や心を揺さぶる感動体験を経験していくことで、豊かな感性(五感・五官)を育てていくことができます。又、幼児は友だちと協同して遊ぶことを通して、「自己の世界」から「他者と関わる世界」へと物の見方や考え方、人間関係を広げて新しい価値観に触れていくので、自己発揮や葛藤、つまずき、共感など幼児の発達に必要な体験を積み重ねられるような保育を実践することが大切です。そのことは、友達と対等の関係性が築けるような自己主張と自己抑制のバランスを保ち、コミュニケーション能力を育てていくこととなります。

日々の保育で子どもに何を育てていくのかを常に意識して実践できるように年間カリキュラムを作成し、乳幼児期におけるESDの年齢に応じたねらいを明確にした保育実践をおこない、保育の充実を図ることが求められます。

西宮市立鳴尾北幼稚園 河崎 祥子



幼稚園：森の自然体験

ESDの理念を幼児教育に活かすには

ESDは決して目新しい教育ではなく今まで幼児教育が大事にしてきた心情、意欲、態度を育てることであり、それが人間形成においていかに重要であるかを再確認することです。そのために、私たちはESDにおける「育みたい力」をしっかりと見据え共通理解した上で、乳幼児期の発達を見直し、その発達の節目をきっちりと越えていけるような保育活動をしていかなければなりません。子どもの発達を保障するために、それにふさわしい教育活動をどのように展開していくか、環境構成や援助はどうあるべきか等、ESDに掲げる育てたい力を意識しながら検討していくことが必要です。

■体験を保証する

地域や人とのつながりが希薄になった現代を生きる子どもたちだからこそ、幼稚園で様々な人と関わり、自然体験など様々な体験をさせなくてはならないのです。それには遊びの中で、自分で選択したり、試したり、失敗したり、最後までがんばったり、自分の思いを伝えたり、友達の気持ちに気付いたり、という様々な経験ができる教育の場を保障することが大切です。情緒の安定、他者への信頼、自己肯定感を乳幼児期に獲得した子どもは、将来どのような社会においてもたくましく、人とつながり生きていくことができるだろうと考えています。

■子どものモデルは大人

また、幼児にとって先生や親といった身近な大人は絶対的なモデルです。幼児教育は親教育の場とも言われています。大人の意識や行動を変えていくことが次世代である子どもの生き方を決めていきます。今の子どもや大人の実情を正しく把握し、そのために幼稚園等教育機関はどのような手立てをしていくのか、自分にできることは何か、保護者と一緒にできることは何かを考えて子どもの将来のために有意義な活動に取り組んでいきたいと思えます。

西宮市立夙川幼稚園 阿部 久美